第２６回 KEKコンサート

～　ヴィオラ・ダ・ガンバ　コンソート音楽の夕べ　～

『Buffet delle Viole da Gamba』

２００８年４月１８日（金）１８：００開演
高エネルギー加速器研究機構　研究本館１階レクチャーホール

プログラム

髙橋 伸哉 （1962- ）	「三つのベンチで」より　1997 遊歩道で / 池のほとりで
J.デ･プレ（1440 頃-1521）	アヴェ・マリア　1497?
G.サルバトーレ（17c.初-1688 頃）	カンツォン　第 2 番　1641
水野 勉 （1949- ）	コラール「五月の赤い靴」　1989
H.パーセル（1659-1695）	ファンタジア　第 7 番　Z742　1680
D..オルティス(1510 頃-1571)	レセルカーダ　第 2 番
D.コンセイサン（1695 頃活躍）	「戦い」　第五旋法　1695

休　憩

J.S.バッハ（1685-1750）	フーガの技法より　対位法　第１番　BWV1080
	アリア　BWV590
佐藤 容子 （1971- ）	「想花」 1999 響き合って / 雨のように / たわむれて / 風のように
P.レーンフーツ（1957-）	「陽はいつ輝くの？」　1981
廣瀬 量平（1930- ）	「高雅な猫のための組曲」　1990 プレリュード-アレグロ/アリエッタ/スケルツォ・ミス

テリオーゾ/ガボット/ジーグ

＊　曲目は変更になることもあります

演奏　神戸愉樹美ヴィオラ・ダ・ガンバ合奏団
神戸愉樹美Tr. 小澤絵里子Tn. 野口真紀B. 多井智紀B.

Ｙ Ｋ Ｖ Ｃ
神戸愉樹美ヴィオラ・ダ・ガンバ合奏団
〒222-0032　横浜市港北区大豆戸町808-2
8-108
Tel. 045- 532- 2696　Fax.045- 532- 2697

神戸愉樹美ヴィオラ・ダ・ガンバ合奏団

１９８３年に結成。ガンバ合奏特有の「融和した響き」を魅力ある素材として捉え、古典曲では「個と調和」を、現代曲では「創造の世界」を繰り広げている。ジャンルを越えて柔軟に対応する技を持つ、どうやら世界でも珍しいガンバ･コンソートらしい。’００年、米国ガンバ協会大会の演奏でセンセーションを巻き起こしたのをきっかけとして、’０２、’０４、そして本年春にも長期北米ツアーを行い、大好評を博した。この他、海外では独･仏･ベルギー、日本では旭川から倉敷まで各地で公演。演奏回数は３３３回を、初演曲は１３０曲を越える。

近年ＣＤ録音、楽譜の出版を始めた。共演者はリコーダー、チェンバロ、リュート等の古楽器、古楽アンサンブルの他、歌、語り、合唱、邦楽器では笙、胡弓、篠笛と多彩。’08年秋にはインドのシタールとの共演を計画中。http://www.ykvc.jp

予告
６月１１日（水）１９時　東京オペラシティー近江楽堂　演奏会「猫とその仲間たち」
- 廣瀬量平「高雅な猫のための組曲」楽譜出版を記念して -　　YKVC主催

CD
- Buffet delle Quattro Viole da Gamba　　YKVC0201
  ・・・・「ファンタジア第7番」「戦い」「想花」「高雅な猫のための組曲」収録
- 花鳥猫風月　Foglia d'olivo, 水野勉作品集　　YKVC0302
  ・・・・「五月の赤い靴」「キャトルツ」収録
- どっぷりバッハ　　Ja, doch BACH mit Gambenconsort　　YKVC0503
  ・・・・「主よ人の望みの喜びよ」「トッカータホ短調」収録
- Echoes from Bronze Bells（銅鐸反響）　VMM2029　　・・・・「インドネシア」「インド」収録
- Imagined Landscapes（隠藏風景）　VMM2033
- Yearning for Autumn（慕秋）　VMM2035
- Music of the Autumn Winds（秋風の曲）　VMM2037
- いろいろ さまざま ところどころ　増本伎共子の世界　FOCD2550

ヴィオラ・ダ・ガンバの話

ヴィオラ･ダ･ガンバは 16-18 世紀に西洋の宮廷、教会、家庭で愛好された弓奏擦弦楽器です。スペイン、ポルトガルにはじまり、イタリア、フランス、イギリス、ドイツで盛んに用いられました。イタリア語でガンバとは脚を意味し、バス（低音）、テノール（中音）、トレブル（高音）のサイズがあり、いずれも脚に挟んで構えるところから、ヴィオラ･ダ･ガンバと呼ばれます。腕（ブラッチョ）に構えるヴァイオリン属とほぼ同時にありました。 弦の本数が 6~7 本であることや、構造上の特徴から和音や調和した響きは得意ですが、古典派やロマン派の音楽には不向きな楽器として忘れられました。 19 世紀の末より復興し、日本でも第二次大戦後に知られるところとなり、今日の古楽器ブームの先端を開きました。

古くは、キリシタン来日の 1562 年に渡来しました。 宣教師のルイス･フロイスやアルメイダによると、翌年に大友宗隣が宣教師の住院（大分）に招かれ昼食の後で、1581 年に織田信長が安土のセミナリオ（現在の中学校、当時は上流武士の子供が日本の文字、作法、カトリックの教えなどを学んだ）に鷹狩の後で立ち寄って、1591 年に豊臣秀吉が聚楽第で天正遣欧少年使節を謁見の時に、この楽器を聞きました。